

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ヘルマン・ヘッセ 『デミアン』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 133 回のツイキャス読書会の課題図書は、ヘルマン・ヘッセの『デミアン』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

無秩序と不確実な世界を生きようとする困難さ

(引用はじめ)

私は、自分の中からひとりで出てこようとしたところのものを生きてみようとしたに過ぎない。なぜそれがそんなに困難だったのか。

(引お終わり)

デミアンという友人を通じて、主人公シンクレールが自己自身として生きることを模索する本作を読みながら、「既成の価値観に縛られず、自分の可能性を信じて強く生きていきなさい。」というニーチェのメッセージを何度も思い起した。

主人公が最初に所属していた“綺麗で秩序立った世界”は世界の全てではなく、一方、悪党クローマーのように秩序への単なる反感・反抗という単純な二項対立でもって世界の全てでもない。かけがえのない一人の人間が自己自身として生きているのであれば、世界は複雑で無秩序なはずだし、世界がそうあって良いはずなのに、この世界の経済システムでは個人は一つの生産要素であり、戦争となれば個人は一つの駒として綺麗に整頓されて組み込まれる。

私自身のこれまでを振り返って、それが正しいと信じて中学・高校と勉強して大学に入学し、大学では一人の人間を数学記号で綺麗に秩序立って表現する経済学を学んで社会が分かったような気になって卒業し、就職先でも予測できないことや不確実を恐れる顧客や上司のために、単純化・簡単化で着飾った計画書・リスク管理書を作成しながら社会人五年目になった。

“綺麗で秩序立った世界”という世界全体のほんの一部しか見てこなかった私も数年前から文学や哲学の本を読み始め、自己自身として生きることについて漠然と考えてみたりした。しかし、冒頭の引用文の通り、それはとても困難なことであり、「その困難さを本当に理解しているのか」、「そのうえで真剣に自己に向き合っているのか?」、「お前の理解度は実践からはほど遠いぞ!」と本作を通じてヘッセやニーチェから強く叱責を受けているような気がした。

(おわり)

「手さぐりで前進すること、とは？」

今回初めて読みました。「デミアン」という作品があることも知りませんでした。

読んでも何だか分からない文章には何か隠されているんだろうけど、私にはよく分からないなという感じでした。

半分ぐらい読んで、何の事だろう？「デミアン」という人物がすごく不思議だなと思うぐらいでした。

でも、解説をしていただいて、カインとアベルのお話も少し分かったので、最後まで読み進める事が出来ました。

最後まで読んだものの、何だか分かるような、分からないような感じでしたが、心に残った所があって、その部分は何回も読み直しました。

(引用 はじめ)

そしてこのとき突然、激しい焔のように、つぎの認識がぼくの身を焼いた—どんな人間にも、なにかの「任務」はあるが、自分でえらんだり、限定したり、勝手に管理したりしていいような任務は、誰のためにも存在してはいない。新しい神々を欲するのは、間違っている。世界に対して何物かを与えようとするのは、まったく間違っている。めざめた人間にとっては、自分自身を探ること、自分の心を堅固にすること、自分自身の道を、それがどこへ通じていようとも、手さぐりで前進すること、それ以外に決して決して、なんの義務もありはしないのだ。(岩波文庫 P219)

(引用 おわり)

自分の信じた道を突き進むという事なのか？ 手さぐりで前進することは目的地に着くまでは、よく分からないけど、自分を信じて突き進むという事なのか？ それとも全然違う事なのかな？ と思いました。

私の読解力では、よく分からない事が多いのですが、意味を理解できるときっと面白くてよい作品だと思いました。

読書会で、さらに解説していただけると嬉しいです。

よろしくお願いします。

(おわり)

『自分自身について』

自己自身とは一体何なのだろう。
デミアンを読み終わりぼんやりと考えていた。

眼で見ることも、耳で聞くことも、肌で触れることもできない。けれど、いつも気配だけ漂わせている奇妙で神秘的な存在。

それへと至る道をシンクレールは求めている。

世間では自分らしく生きたいなんてことを言ってる人がいるけれど、全部ごまかした。
彼ら彼女らは想像を膨らませ過ぎて、地に足が着かなくなっていく。
一方で自分の重みに耐えられなくて他人にのしかかかってくる人もいる。

そのどちらでもないし、なれないからこそシンクレールは悩み苦しむのだ。

自己自身になるためには問答無用に背負わなければならないことばかりある。世界が私の表象ならば世界を背負うことになる。これ以上重みのあるものは世界にはない。私が世界なのだから。

そもそも自己自身になる理由が見つからない。自己自身にならなくても生活できる。なぜそれを求めるのだろうか。
やはり人間各人が自己自身だからこそ自己自身になるべきなのだ。
それが本当だから。

自分に対する態度と他人に対する態度は同じだと私は思う。自分をよく観察してる人ほど、他人をよく観てる。自分を知ってる人ほど他人を理解できる。
全ては私から始まるから。

自己自身に向き合う人には「しるし」が付いてる。そう思う。

私にも付いてればいいな。

(おわり)

『孤独からの独り立ち』

自分が初めてこの本を手にとったのは、高 3 の年の晩春頃だった。大型書店に並んでいた本の中からもなぜかこの本に自然と手が届き、迷わず購入したことを今でも覚えている。受験戦争の真最中だったのにも関わらず、自分はこの本を何日かにかけて読み終えた。当時は章ごとに繰り広げられるエピソードに一つ一つ感傷的になったり、歓喜していたが、今回はほぼ何も感じなかった。ちょうど 5 年ぶりの再読でもあるので、それ相応の懐かしさくらいは感じられると思ったが少し甘かったようだ。しかし、この本の素晴らしさを客観的に認めることはできるようになったかもしれない。

シンクレールという主人公について、この小説はあまり語らない。彼はいつも思考しているが、はっきりした行動を示さない。彼が何かに没頭しているのは、絵を描いているシーンくらいかと思われる。彼は文学者にも、哲学者にも、絵描にも見える。要するに、彼は世俗と一定の距離を置いているすべての若者を象徴しているとも言える。彼はいつも孤独で、悪に魅了されたり、支配されたい願望がある弱い存在だ。が、同時に自分を光へと導いてくれる存在を渴望している。彼は善も悪も他人にその滋養分を求めて、卵の中に居座って安住していた。彼は世俗と距離を置いていると思っていたが、それはただ殻の中に逃げて見えないふりをしていたにすぎなかった。

彼をその殻から脱出させたのは、他人に感情をぶちまけることから誰かを本当に大切に思う愛の感情に目覚めたことだった。デミアンやエヴァ夫人の前では幼い子供のように振る舞うのは、今まで自己防衛で築いていた自我を脱ぎ捨て、改めて成長しようとしているシンクレールの姿を見せるためではないかと思った。

人は皆孤独である。誰かに認められたいのも、誰かに愛されたいのも、か弱い自分の存在一つでは心狭いからだろう。でも誰かに何かを求めて自分を満たしている限り、永遠にその過程を繰り返していることになる。ひたすら自分と他人の共通点に頭をつっこみ、安堵しているだけでは、いけない。自分の中にデミアンを持たなければならない。

(おわり)

炭山韓国読書会のブログです。 <https://ameblo.jp/shimogashiwa/>
ツイキャスチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/c:nindaranna>

『Demian』 感想文

読んでみて女人禁制の内省的な男の世界を感じた。

ユング心理学の影響を受けたため、この小説はオカルト的なのだろうか？

「失われた世代」向けの文学なのだろうか？

子供の頃のシンクレールは光と闇に分かれた世界に住んでいた。そして、彼は光の世界の一部だった。

だが、悪童クローマーとの出会いによって、闇の世界が蕾のように彼に開かれた。

デミアンはカインとアベルの物語を再評価し、価値の逆転を行った。

この価値の逆転は小説全体に決定的な影響を与えていると思った。

背後にはドイツの戦争責任の拒絶があったのだろうか？

デミアンによってシンクレールはクローマーの悪魔の爪から解放された。

デミアンは主人公に継続的な影響を与える神秘的なキャラクターだと思った。

奴隷道徳からの解放、ハッチング(Hatching)を示唆していると思った。同時に解決方法が現実離れしていると思った。

シンクレールは自己実現、あるいは個性化の過程で多元的な困難をたどるが、力尽きて、深い暗闇よりほか何も前に見えなくなる。

シンクレールの最後の指導者はエヴァ夫人だった。彼女の目の中にはシンクレールの運命が映っていた。

女性に対して儀礼的でありすぎて、生身の女性が描かれていないと思った。

そして、この小説は現実世界から逃避している感じを受けた

負傷兵となったシンクレールに、デミアンはエヴァ夫人から預かったキスを捧げ、彼が自己実現したことを告げて去ってゆく。

ラストシーンでシンクレールは黒い鏡にデミアンにそっくりの自分自身の姿を見て真の自己を認識した。

彼はシェル・ショックに襲われなかったのだろうか？

シンクレールに二つの異なる運命があると思った。両方受け入れるのがシンクレールの人生だと思った。

一つは、個々の運命であり、シンクレールの倫理的目標は個性化、すなわち自分自身になること、

もう一つは、集団的運命である。

個人の運命と集団的運命が非常にまれに一致するのが戦争だと思った。

(おわり)

『それでも集合に翻弄される個人の悲劇』

僕は新しい本を読む時、ほとんどの場合図書館で借りて読む。読前読後に関わらず、手に入れたいと思ったもののみ買う。『デミアン』も初めは借りたが、数ページ読んだだけで「これは自分にとって大きな意味を持つ本だ」と思い、書店に向かった。その予感は的中していた。

たくさんインスピレーションを受け、道を示され激励されたが、主なものだけ挙げようと思う。

まず、この小説はかなり反戦色が強いと思った。シンクレールもデミアンも自分自身への道を進もうとする誠実で美しい魂の持ち主だ。救われて然るべきこういう人間が、おそらく集合的無意識によって醸造され形を成してしまった大戦に巻き込まれ、儚く死んでいく。ピストーリウスが自己自身への道を歩むことすらできない〈運命〉だったように、シンクレールもデミアンも、若くして戦火に死ぬという〈運命〉だったのだとしたら残酷だ。読後はエピソードが重い意味を持ち涙腺が緩む。だが、彼らはその運命を知っていたのだろう。この世の実態はひどく不平等だが、自分の運命を生きる以外にベストな生き方はないのだろう。それらの運命を辿った人々を過去に持って、今を生きる自分の存在を俯瞰的に感じた。トーマス・マンの『魔の山』と通じるものだ。

リアリズム小説ながらファンタジックなまでに偶然の出来事や神秘体験を描写し、それが違和感なく収まっていることも素晴らしい達成だ。マジックリアリズムまで行くと、あくまでフィクションという感も否めないが、『デミアン』はあってもおかしくないエピソードばかりだ。事実、僕自身も奇跡的なことに遭遇したり、思いが通じたり、虫の知らせを感じるようなことがある。これらは現代の合理主義社会では偶然だと一蹴される。しかし、現代における光である合理性ばかりでなく、闇である非合理性も確実に存在する。非合理性を無視しては、世界の半分しか見ていないことになる。デミアンの母親であるエヴァ夫人は、これ以上ない慈愛に満ちている一方、ある意味背徳的で、見方によっては胡散臭い。小説全体もオカルティックだ。だが、それらをないことにすると真の自分には辿り着けない。夫人はシンクレールがその道を歩むためならば、自分をものにしようとしても良いとまで言う。男が魔性の女に惹かれるのは、そのトータリティーゆえだと思った。

また、『デミアン』を読んで〈文学の勝利〉という言葉が頭に浮かんだ。現在、小説は売れずビジネス書隆盛だ。合理性と非合理性の戦いでもある。効率と非効率などいろんな言い方ができるだろう。だが損得勘定の合理主義は、人間に真の幸福をもたらさないことは明らかだ。『デミアン』は徹底して非合理性を擁護し、人間にとって真に重要なものを示したと思う。

最後に自分への戒めでもあるが、デミアンの「完全な真剣さ」を見習いたいと思う。合理主義だけで進む間違いに気付き、非合理性や魔性も包含するアブラクサスをはじめ、排斥されたミトラ教、ゾロアスター教、錬金術、古神道などに残酷だが真実の教えがあると知りつつも、現代にまみれてそれをただのおしゃべりにしてしまう自分の軽薄さは痛感していた。たとえ翻弄されようとも、というか翻弄されるのが付きものの世の中だからこそ、デミアンやシンクレールのようにより真剣に自分の道を進んでいきたい。

(おわり)

『 二つの世界 』

十歳のジクレーエルの世界は、愛情深く厳格な家庭から成り立ち、清潔で正義に守られていた。要は善の世界。私にも、覚えがある。十歳くらいまでは、あたたかな毛布のような世界で生きていた…というより、その他の世界を知り得なかった。

だが、ある日を境にジクレーエルは、鳥が卵から出るように、別の世界に放り込まれる。その世界の水先案内人がフランツ・クロオマアだった。ジクレーエルの何気ない嘘が呼び水となった。それは苦しみや裏切り、嘘や暴力的な悪の世界だった。

この世界も覚えがある。私も十歳を過ぎた辺りから、友人関係に悩んだり、親に嘘をつくことも増えた。大人の偽善がわかるようになったのもこの年頃だ。

ジクレーエルの卵の殻から頭を出して、戻れなくなった焦燥感が手に取るように伝わる。

ただ、この二つの世界は対極的ではあるけれど、決して乖離しておらず裏表なのだと感じた。だから、人間として生きていくには、どちらの世界も避けようがない。

この小説は、ジクレーエルがどのようにこの二つの世界に折り合いをつけていくかの物語に感じた。

彗星のごとく現れて、ジクレーエルをフランツから守ったデミアン。そのデミアンは、アベルとカイルの話をして、ジクレーエルの善と悪の認識を吹っ飛ばす。ピストリウスのアブラクサスと同じく、今まで神が善で悪魔が悪だと思っていたジクレーエル。私だってそうだった。でも、フランツとデミアンが対をなして、ジクレーエルの前に現れたように、すべては裏表だ。

戦場で、デミアンが代行したエヴァ夫人からのキスからも、男女や友人、立場の関係は思ったよりも曖昧だ。

ピストリウスが語ったように「誰かを殺したくなったり、みだらなことをしたくなったら、その空想をしているのはアブラクサスなんだ」というように、誰の心にも神とアブラクサスは同居しているし、臆病なアベルと暴力的なカインもいるのだ。

そして、ジクレーエルがベアトリーチェの絵の下に書いた「運命と心情は、同一の概念の名である」(岩波文庫 P.144)にあるように運命と心情も対の概念を免れない。

誰にも等しく降りかかった第一次大戦という運命に、ジクレーエルはどのような心情で立ち向かうのか…知りたくなかった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/> スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『自己形成 自己とは偶然か必然か、特殊か普遍か？』

カントの『判断力批判』に『合目的性』という概念がある。『合目的性』は『概念の原因性』と言い換えられる。例えば、「人間の生命」は、一つ概念だ。その概念の原因、つまり人間の生命の原因は、「偶然 or 必然」、「特殊 or 普遍」、どっちなのか。それが問うのが「原因性」である。主観的には偶然であり特殊、客観的には必然であり普遍的だと、考えられるのが人間の生命だ。

主観的に人間の生命が偶然の産物で特殊だとすれば、それをどう意味づけるのか？ これが「生きる意味を問うこと」であり、生きる意味を自発的に獲得し確信を深めるのが「自己形成」である。プレモダンあれば、人間の生命は、創造主の思召し(神による自己形成)であるが、近代以降の人間は、神に頼らず、自己のみで生きる意味を問いながら、自己形成するようになった。「カインのしるし」というのは、神に頼らない自己形成の比喩だ。

現象の世界で自己形成するには、生きる意味を問い続けるプロセスが必要になる。『デミアン』にはシンクレールの自己形成が描かれている。デミアンやエヴァ夫人というのは、シンクレールが生きる意味を問うためのプロセスである。だから、妄想の産物のような、現実感のない人々だ。

生きる意味を問うというのは、抽象的な作業だ。自己形成は徹頭徹尾、自己の抽象化の作業である。交尾して、子孫を残すだけなら、猿と同じで、生活圏内の環境への適応を目的とした具体的な自己形成だけで存在できる。だが、広範囲に社会秩序を形成する近代人は、より複雑な自己形成を求められる。パパとママのいる安全な家庭だけでは自己形成できない。クロオマアを通じて、一つしかなかった世界が、シンクレールの前で、「光と闇」の二つの世界に分岐していった。

なぜ、生きる意味を問うのか？ それは、人は、例外なく死ぬからだ。現象として生成し、消滅するには、なにか目的があるのではないかと考える。目的を考えざるを得ないのは、すでに人間がすでに存在してしまっているからだ。矛盾した二つの世界に住めばなおさらだ。あとは、自己が偶然か必然か、特殊か普遍かを考えることになる。「概念の原因そのものを問うこと」を『合目的性』と名付けている。自己形成は、自己の原因そのものを問うことだ。つまり、「運命と心情(の原因を問うこと)は、(合目的性において)同一の概念(の主観的な問いそのもの)である」(P.144)

自己形成は、徹頭徹尾、主観的な、自己の抽象化の作業だ。人間の生命という概念を、自分で意味づける作業。要するに、自分探しである。

通常は、主観的な「生きる意味」の獲得なり挫折なりを通して、社会秩序に妥協ないしは、適応して自己形成は終わる。この作品では、デミアンやエヴァ夫人のユング的な心理学にサポートされてシンクレールは自己形成を成就する。一方、信仰やイデオロギーに頼って自己形成すると、やがて各所に軋轢が生じて戦争になる。第一次大戦とは、欧州の近代国家が選んだ帝国主義という自己形成の物語の矛盾が引き金になっている。シンクレールの自己形成に、ヨーロッパ近代国家の矛盾が重ねられているのが、この作品のすごいところだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343